

# 全国3例目・「金剛般若波羅蜜經」のこけら経が出土 —高島市天神畠遺跡から。中国仏教の強い影響示す—

**遺跡名** 天神畠遺跡（てんじんばた）

**所在地** 滋賀県高島市鴨

**調査主体** 滋賀県教育委員会

**調査機関** 財団法人滋賀県文化財保護協会

**調査概要** 当遺跡は縄文時代後期から中世にかけての複合遺跡です。鴨川広域河川改修事業（青井川）に伴い平成20年度より発掘調査を実施しています。調査では対象区内を蛇行する河道が検出されました。この河道は深さ2.5m程度あります。両岸が検出されていないため、幅はわかりませんが、30m以上になるようです。縄文時代から中世にかけて長い時間河道として機能し、近世の初め頃に埋没したと考えられます。

この河道の堆積層の中から平成21年2月に「こけら経」が、ほぼ一塊で出土しました。堆積層の年代は中世後半と考えられます。「こけら経」は中世の後半、水が緩やかに流れていた河道に納められたものと考えられます。

**時代** 中世後半（15～16世紀）

**出土枚数** 115点（断片や経典名不明のものを除く）

**形態** 長さ298mm、幅21mm、厚さ1mm以下

台ガンナにより削りだした針葉樹の薄板で、薄いところは透けて見えます。写経は片面のみに墨書きされ、1行17文字を基本とします。同じ形状で下半部が欠損しているものが何枚もあり、中央部で束ねて納められたものと推測されます。

**説明** 「こけら経」とは、薄い板材（こけら）に経典を墨書きしたもので、ほとんどが遺跡からの出土品です。藤原理恵氏（2006）の集成によると全国で102遺跡から出土しています。これまで出土した「こけら経」の大半は『妙法蓮華經』（略称：法華經）が記されており、法華經以外では、『阿彌陀經』や『般若心經』、女性の信仰にかかわる『血盆經』などの出土が知られていますが、出土例は非常に少ないです。

今回、天神畠遺跡から出土した「こけら経」のうち経典名が推定できるもの115点のなかで、38点が『金剛般若波羅蜜経』（略称：金剛般若経）です。

『金剛般若波羅蜜経』の出土例は全国で3例目となります。滋賀県では、2000年（平成12年）に滋賀県草津市の柳遺跡（14点）から出土した14世紀のこけら経があります。それ以外に、1990年（平成2年）に出土した愛知県清洲城下町遺跡の16世紀の例があります。これらは互いに孤立的で明確な位置づけができないものでした。しかし、今回の発見により全国3例のうち2例が滋賀県内出土であることがわかり、その意義が注目されます。

**こけら経の地域性** 『金剛般若波羅蜜経』は鳩摩羅什訳の古い経典ですが、とくに中国の禅宗で重んじられました。日本に伝わる金剛般若経の多くは、中国から渡來した僧や中国の留学から帰国した禅僧らが書写したものです。中世の近江は、入元僧である寂室元光（1290～1367）が永源寺を開いて臨済宗永源寺派の祖となるなど、中国新来の仏教文化に特に敏感な土地柄でした。近江出土のこけら経には、中国仏教の強い影響が示されている可能性が高まります。

また今、あらためて他地域の「こけら経」の内容をみてみると、真言宗の影響の強い四国・徳島県の敷地遺跡からは『般若理趣経』を書いたこけら経が出土しています。『般若理趣経』は真言宗の根本経典のひとつとして知られており、こけら経の内容にはこれまで一般に思われていた以上に、地域的特色が存在するように思われます。天神畠遺跡から出土した『金剛般若波羅蜜経』は、今後の「こけら経」研究に波紋を広げていくものとなります。

なお、天神畠遺跡出土の「こけら経」115点について、経典別の内訳を詳しくみますと、

#### 『妙法蓮華経』69点

『金剛般若波羅蜜経』38点

『梁朝傳大士頌金剛経』3点

『摩訶般若波羅蜜経』2点

『大般若波羅蜜多経』1点

『法華經開示抄』1点

『十二門論宗致義記』1点、です。

これらの中には全国でも出土例の発表されていない経典（梁朝傳大士頌金剛経など）も含まれています。ただ、今回は経名の検索を大正期に日本で編集された『大正新脩大藏經』所収の経典でおこないましたが、実際の経典は歴史的変遷の中で「異本」が多く存在します。そして金剛般若波羅蜜経の異本の中には、梁朝傳大士頌金剛経と全く同じ文言を含む写本が存在します。断片化した今回の出土経ではそれがどちらの経典のものであるか断定するにはいたっていません。いずれにしても、1遺跡からこれほど多彩な内容の「こけら

「経」が発見されたことは他に例がありません。

**見せ消ち** 出土したこけら経の中に誤字を修正したものがあります。誤字である印として「ヒ」の字を横に書き入れています。出土品には「他」の字を「佛」と書き間違えたので、それを修正するために誤字の左側に小さく「ヒ」と書き入れ、正しい文字を右側に書き入れたものなどがあります。この「ヒ」は「見せ消ち」と呼ばれるもので、修正前の文字が見えるようにした修正方法です。「ヒ」の「見せ消ち」のあるこけら経が見つかったのは、全国初の出土例となります。

今回出土の「こけら経」は内容が豊富で、わが国仏教史、典籍学、国語学において貴重な資料といえます。

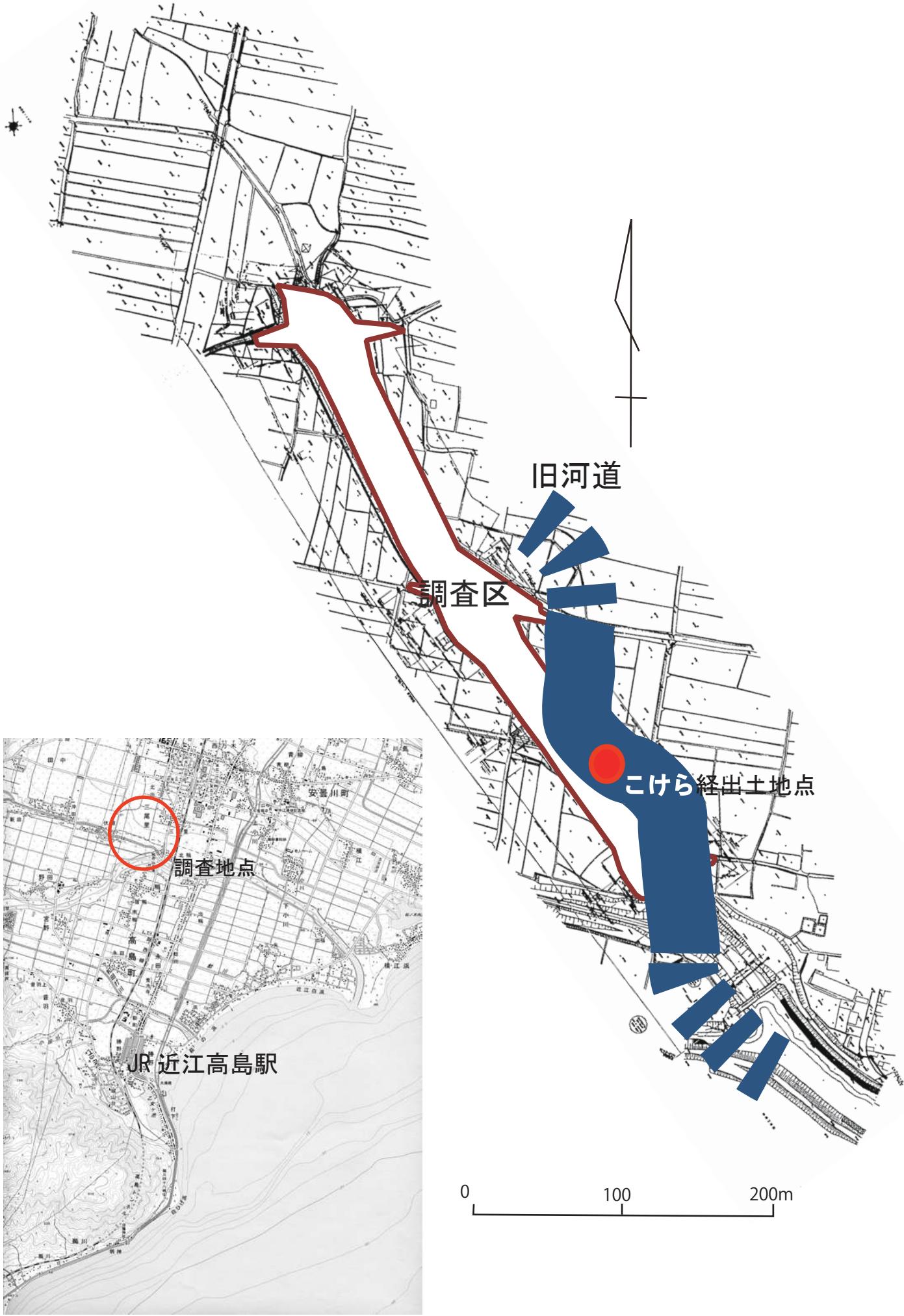
(説明執筆：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 井上優)

#### 語句説明 ①こけら経

「こけら経」とは、薄い板材（こけら）に経典を墨書したもので、お寺に奉納されたものが数例ありますが、ほとんどが遺跡からの出土品です。平安時代末期（12世紀）に近畿地方で発生したと考えられます。供養などのために写経され、通常20枚～40枚程度をひと組にして、紙縫や紐でしばって納めたようです。川や堀、溝、池など水に関する遺構から出土する例が多いものです。

#### ②金剛般若波羅蜜經（こんごうはんにやはらみつきょう）

1巻。鳩摩羅什（くまらじゅう 344～413）の漢訳。サンスクリット語の経題は「金剛（ダイヤモンド）のように煩惱、執着を断ち切る知恵の完成」です。内容は経題のとおり「あらゆるものに、とらわれてはならない」ことを説いています。インド、チベット、中央アジアで流行した経典ですが、中国では禪宗の六祖・慧能（えのう 638～713）がこの経典の「應無所住而生其心」（應に住する所無うして其の心を生ず）という一句を聞いて悟りを開いたといわれ、それ以来とくに禪宗において重んじられています。日本に残る写経の遺品も、中国からの渡来僧や中国帰りの留学僧が書写したものが多です。なお、天台・真言僧、儒学者などにも愛読され、本經をもとに注釈や講義がおこなわれています。



天神畠遺跡位置図



調査状況



こけら経出土状況

王  
如  
是  
等  
七  
寶  
聚  
有



「金剛般若波羅蜜經」  
出土した38枚中の1枚



「見せ消ち（みせけち）」のある法華經

「佛」の字が誤りであったため、左側  
に「見せ消ち」の「ヒ」を入れ、右側に  
正しい文字「他」を書き入れている。

